

## 〔調査報告〕

## 働く主婦と育児の問題

## 第III報 女教師における概況

至誠会・一三会

森井 つた・小谷 愛子・山県小伊志・土肥 浩子  
モリイ つた コタニ アイコ ヤマガタ コイシチ ドヒ ヒロコ

松野マサヨ・浦田とめ子・清水五百子・佐藤椰子枝  
マツノ マサヨ ウラタ トメコ シミズイ ヒロコ サトウヤスエ

中川 貞子・岩本由基枝・矢野千鶴子・笠井 和  
ナカガワ サダコ イワモトユキエ ヤノチヅコ カサイ カズ

(受付 昭和50年10月8日)

## はじめに

婦人の社会への進出は目覚ましいものがあるが、職業と家庭の両立については世界各国共に共通の悩みがあるようである。今年(1975)の国際婦人年の会議にも、議論方法や態度の良否は別として、古くから続いている社会情勢や習慣について両立の困難のあることに言及しているようであった。私共も自分自身のそれぞれの経験から、仕事と家庭の両立には婦人の負担の多いことを思い、よりよい両立をめざして、女医、女教師、看護婦、保母、電話交換手、女工員等各分野に働く主婦の実態を知るためのアンケート調査をはじめた。先ず、私共至誠会員の概況を第一報(東京女子医科大学雑誌43(6)516~520昭48)とし、続いて台湾在住至誠会員の概況を第二報(43(9)812~816昭48)として報告した。女医としては開業という仕事の態勢が育児には好都合の面もあり、既に孫も成人している年代の至誠会員の回顧としては、苦勞は多かつたが両立できたし、子供

も孫も幼時多少心配した点もあつたが、悪い影響もあまり見られず、立派に成人しているというものばかりであつた。台湾の至誠会員としては、育児を手伝う人手を得やすいことと、各夫婦別の居室は充分に分離されながらの大家族様式で、アンケートに応じた全員が子供との接触には智慧をしぼつて注意しながら両立を可能として、現在なお開業医として医業に従事していた。

今回は、小学校、中学校、高等学校に勤務する女教師のアンケート調査を試みた。すべてが勤務態勢であり、担任があり、体育その他子供と共に行なう運動も多く、生涯勉強しなければならない立場で、どんな工夫で職業と家庭を両立させ、育児を考えているかを知りたいと思つたのである。

(このアンケート調査は、育児休暇の法案の通過前に行なわれたものである)。

## 対象および調査方法

## 対象

現在小学校、中学校、高等学校に勤務する既婚で子供

Tsuta MORII, Aiko KOTANI, Koishi YAMAGATA, Hiroko DOHI, Masayo MATSUNO, Tomeko URATA, Ioko SHIMIZU, Yasue SATO, Sadako NAKAGAWA, Yukie IWAMOTO, Chizuko YANO, Kazu KASAI (SHISEIKAI-IZUMIKAI): Child care of working housewife. Report III. Cases of woman teachers.

のある女教師で、日本各地（東北、関東、富山、近畿、中国、四国、九州等）の集計である。一三会員を通して各地にアンケート用紙を配布したので、会員のいない北海道は入っていない。女教師は全国では小学校で約20万、中学校と高等学校で約11万といわれるが、その中の少数の者で、概況として観察を行なった。

調査方法

前報と同じアンケートによる調査で、多少内容の書き方を変更した。アンケートとして読み難く、書き難い点を回答者から種々指摘されたが、この紙面をかりておわびすると共に、今後の調査には充分注意するようにしたいと思っている。

調査成績および考按

アンケート発送数は約600通、返信のあつた396通の中、養護教員と不備のもの30通を除いた366通についての集計である。返信は約66%にあたり、有効61%で、返信の割合はよいようである。但し、全女教師中の概婚者の割合がわからず、子

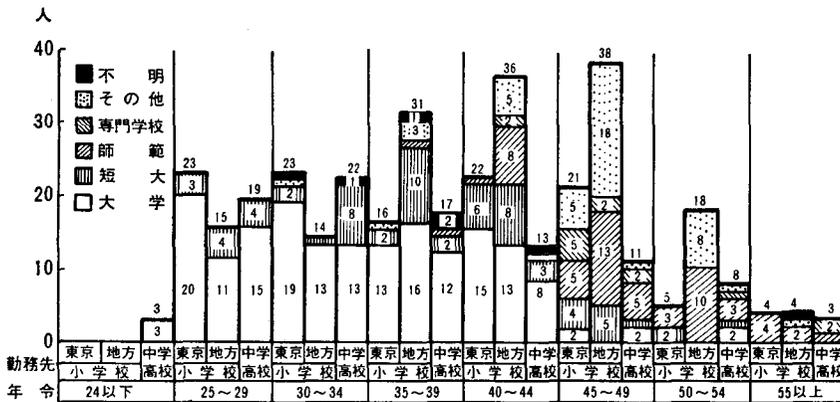
供のある割合も不明なので、その検討はできなかった。数の都合上、小学校を東京と地方の2群とし、中学校、高等学校をまとめて1群として観察することにした。

妻の年令と学歴

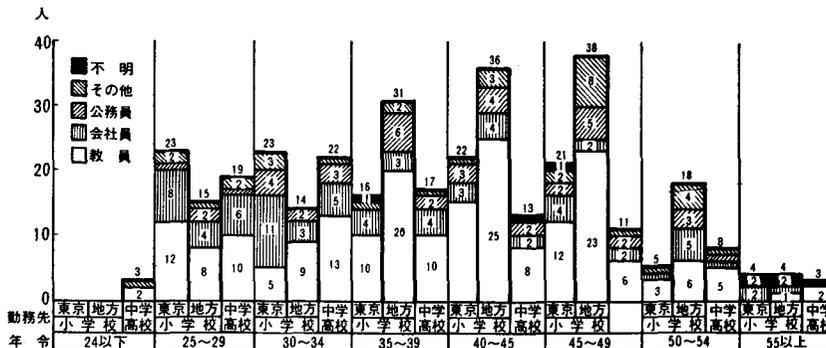
年齢は23歳から63歳で、24歳から50歳が大部分を占めているのは、対象が現在勤務している者だからである。学制改革があつたので当然のことであるが、44歳までは大学卒が多く、45歳以後は師範学校、専門学校が多い。地方では短大やその他の学校も多くなっている。

夫の職業

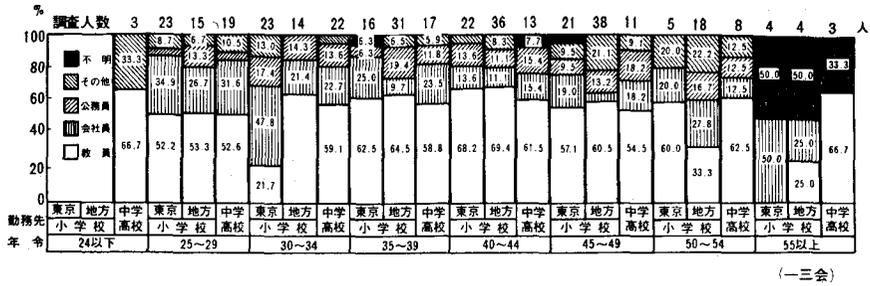
同業の教師が多く、会社員、公務員と勤め人がつづき、自由業その他は少数であつた。第2図は実数で、第3図は%であらわして見た。同業のよさは理解の深さにつながり、学期末等忙しい時期は共に忙しい反面、休暇も同時期であるため、家



第1図 妻の年令と学歴



第2図 夫の職業



第3図 夫の職業 (%)

族団楽の時にあてる事ができて、子供への悪影響を少なくすることもできるという答も多かった。この点は台湾至誠会員が殆ど同業で、理解、協力のよいこと、妻は全員医業を続けていた状況と似ているようである。

結婚初産等の年令

結婚年令と初産年令および第1子と第2子の間隔については、一般女性の統計と変わらない。古くは結婚年令が遅く、第1子出産も遅く、殊に第2子出産には種々の抵抗があつて、調節したりしている向きが多いのではないかとされていたので調べて見たのである。結婚年令も25-26歳までが多く、第1子は殆どすべて1年目には生れている。第2子、第3子も2-3年の間隔で、中に調節をして6-10年間隔のある例も少数認められた。婦人の職業に対する考え方も年代により異なり、至誠会員の若い年代と似ているように思われた。

子供数

一般と同じく2人が多く、1人、3人の順で続く。1人が多いのは調査対象が若いので、現在1人生れた段階を含んでいる。教育者の立場として、子供は3人がよいと思うが、経済的、勤務態勢的諸般の事由で、産みたくても産めないという訴えもかなりあつた。

流・早・死産および未熟児

至誠会員としては開業という在宅の職業態勢があつたが、女教師の場合はすべて勤務態勢で、運動も子供と共に行なうことが多く、担任もあり、体育、遠足、プール等、妊娠中、出産後の身体的無理があるのではないかと思ひ、流早死産、未熟児の頻度について集計して見た。

第3表のようになり、未熟児の頻度は一般の男児5.4%、女児6.5%よりはやや多く、8%前後であつた。死産と書いてあつたものは3例であつたが、これは出生後1-3日ぐらいで死亡したもので、真の死産ではなかつた。自然流産の全妊娠

第1表 子供数

勤務先 子供数	小 学 校			中学校・高校	合 計
	東 京	地 方	小 計		
1 人	39 (34.2)	36 (23.1)	75 (27.8)	34 (35.4)	109 (29.8)
2 人	61 (53.5)	70 (44.9)	131 (48.5)	46 (47.9)	177 (48.4)
3 人	13 (11.4)	40 (25.6)	53 (19.6)	13 (13.6)	66 (18.0)
4 人	1 (0.9)	9 (5.8)	10 (3.7)	3 (3.1)	13 (3.5)
5 人	0	1 (0.6)	1 (0.4)	0	1 (0.3)
6 人	0	0	0	0	0
計	114	156	270	96	366
子供数計	204	337	541	177	718
平均子供数	1.8	2.2	2.0	1.8	2.0

第2表 流・早・死産数

	小 学 校			中学・高校	合 計
	東 京	地 方	小 計		
流 産	41人	61人	102人	26人	128人
人工流産	27/18	46/33	73/51	21/13	94/64
自然流産	36/26	53/42	89/68	27/15	116/83
計	63件	99件	162件	48件	210件
早 産	8人	19人	27人	4人	31人
件 数	11件	22件	33件	4件	37件
死 産	1人	2人	3人	0	3人
件 数	1件	2件	3件	0	3件
生 存 子 供 数	204人	337人	541人	177人	718人
自然流産/総妊娠	36/268 (13.5%)	53/438 (12.1%)	89/706 (12.2%)	27/225 (12.0%)	116/931 (12.5%)

第3表 子供の生下時体重

出生時体重 性 別	小 学 校									中学校・高校			合 計		
	東 京			地 方			小 計			男	女	不明	男	女	不明
	男	女	不明	男	女	不明	男	女	不明						
～ 2,500 g	9	5	3	15	9	3	24	14	6	5	4	1	29	18	7
2,501 g～ 3,000 g	37	38	0	42	68	1	79	106	1	34	22	2	113	128	3
3,001 g～ 3,500 g	37	22	2	61	60	7	98	82	9	35	28	2	133	110	11
3,501 g～ 4,000 g	21	14	1	26	14	2	47	28	3	16	11	7	63	39	10
4,001 g～	2	2	0	2	0	0	4	2	0	2	0	1	6	2	1
不 明	5	6	0	14	13	0	19	19	0	3	4	0	22	23	0
合 計	111	87	6	160	164	13	271	251	19	95	69	13	366	320	32
平 均 体 重	g 3,108	g 3,065		g 3,106	g 3,012		g 3,107	g 3,030		g 3,120	g 3,104		g 3,110	g 3,046	
未熟児発生比率	8.3%			8.0%			8.1%			5.6%			7.5%		

数に対する割合は12%前後で、一般の7～8%より多く、殊に東京が多く13.5%であった。主な原因と考えられるものとしては、体育殊に遠足、プールと遠距離通勤をあげているものが大部分であった。この結果は職業婦人に原因不明の未熟児の多い事、妊娠中の立位の仕事、精神緊張の連続の長時間続く事の流産への影響など、一般にいわれていると同様であった。

#### 育児担当者

母勤務中育児を担当するものは第4表のようで、大多数が祖母である。至誠会員の場合と同様であるが、特に母方祖母が母の安定感のためにもよいといったものはなかつた。祖母がいたからこ

そ勤務を続けることができたという感想は多数を占め、共働き家庭の祖母の役割を考えると共に、祖母の側からも意見をきかなければならないと思つたことである。そして婦人の職業を持つ場合には育児担当者の確保が職業をつづけ、家庭と両立させるための大きな条件になることがうかがわれた。東京、地方共に、知人、他人というものがあるが、これは私的の保育ママという形式のものも含まれるのであろう。東京では乳児期から保育園というものもあり、都会の近隣の交際の少ないことや核家族も関連すると思われ、産休明けからの乳児保育を要望する声も多い。教育の専門職として祖母の育児態度についてはきびしく批判してい

第4表 主な育児担当者

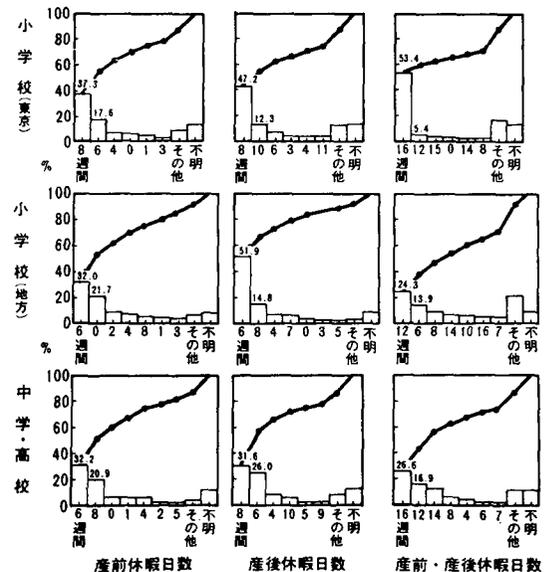
勤務先 育児担当者	乳児期					幼児期				
	小学校			中 高 学 校	総 計	小学校			中 高 学 校	総 計
	東 京	地 方	小 計			東 京	地 方	小 計		
祖 母	92	198	290	86	376	64	164	228	56	284
祖 父 母	7	18	25	9	34	7	24	31	8	39
祖 母 と 女 中	2	6	8	6	14	2	5	7	6	13
叔 母	2	5	7	1	8	2	5	7	1	8
女 中	24	27	51	7	58	12	20	32	8	40
子 守	—	7	7	4	11	—	2	2	—	2
知 人	5	15	20	7	27	—	8	8	3	11
他 人	19	19	38	27	65	7	8	15	18	33
親 類	—	1	1	4	5	—	2	2	4	6
保 育 園	37	11	48	14	62	80	63	143	50	193
幼 稚 園	—	—	—	—	—	5	2	7	—	7
祖 父 夫	—	3	3	—	3	—	3	3	—	3
不 明	13	20	33	12	45	13	20	33	10	43
計	201	330	531	177	708	192	331	523	164	687

る者も多く、乳児期および幼児期前半は母の保育の必要性を知らずに行なえない状態を訴え、育児休暇、再就職の保証、質のよい保育園をのぞむ声もあつた。加えて子供の病気に対しては保育園の病児保育も或程度考えてほしい事や、子供が丈夫でなければ勤務はつつけられないといっている。保育園側としても病児保育はむづかしい頭の痛い問題かと思われる。

妊娠出産のための休暇

妊娠、出産に関する休暇は規定通りで、産前、産後8週又は6週である。妊娠に関しては医師の検診を受けるための月2日の休暇があり、育児に関しては育児時間と称して子供の1年6カ月まで1日1時間半の遅出、早退をみとめられているが、仕事の都合上その通りには休めないらしい。産前、産後および合計の休暇を図示すると第4図となる。休暇なしというのは夏休みを利用したりしたもので、至誠会員のように仕事量を減らしたり、3年とか、1年とか休んでしまうものはなかつた。それで第1子も第2子も切迫流産で苦しんだという人もあつた。東京の方が地方よりは休む日数が多いが、要するに規定はあつても、担任の

都合、担任の子供に対する責任、愛情、代替職員の不足、同僚に対する気兼ね等から夏、春、冬の休みを利用したりする計画産児を行なつたり、産みたくても産まないようにする等して休暇をなる



第4図 出産育児のために仕事を休んだ期日(産前・産後の休暇)

べく減らしている現状で、かなり無理をしている様子である。PTAの親達は女教師の出産のための休暇に対しきびしい見方をしているようであるが、この点についてはアンケートには1枚も書いてなかった。勤務という態勢上、むづかしい問題をふくむかと思われる。

**職業の継続**

母として、職業婦人として、職業を続けているか、途中止めたが、再び職業についたかどうかの項では、殆どすべてが卒業以来ずっと勤務している。途中休んだ人はわずか1~2人であつた。理由として、再就職がむづかしい。共働きでないと経済的に苦しい等があげられているが、根本的のものは、教職は最も男女の差の少ない職業で、女性に適した分野であり、しかも自分の好んで選んだ道だから、辛くても、苦勞してもやり抜く決心が書かれてあつた。至誠会員の開業態勢は自分で開業をえらび、医学の進歩に遅れないように自分で心掛けて行くわけで、勤務の場合よりは一面きびしく、且一面ゆとりがあるように思われた。

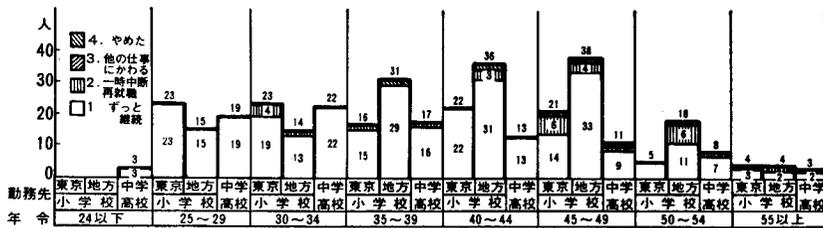
**母子隔離の影響**

幼児期までの母子隔離が子供にどんな影響を与えるかについては、悪影響ありというのが、女医の場合より多かつた。その影響がその子の将来に

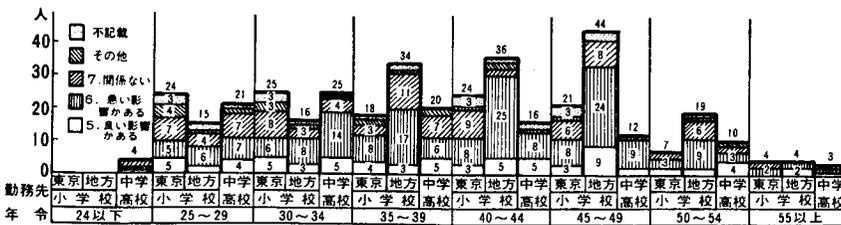
どうひびくかについての追跡調査の必要性を述べているものもあり、私共の子供の側からの調査を意図しているのははからずも一致した。この点に関しては、親が若くて子供も幼ないので、余計心配なのであろうと思うが、至誠会員の古い年代は流石に年月を重ねて孫の成人まで見届けているので自信がある。しかし、中には女教師の娘として、母の職業に対する真剣な取り組み方を見て育ち、職業としての教師の立場を理解し、共鳴して、今夫と共にこの職業を続けているという人もある。母の真面目な態度はやはり子供に理解して貰えるのかと大いに心強く、頼もしく思つたことであつた。一般に、働く母の子に非行少年が多いとか、十分な母との接触がないと異常な性格が多いとかいわれる事についても深い反省を行ない、その欠点を補なうための智慧を働かせなければならないことも忘れないつもりである。

**家庭と職業の両立**

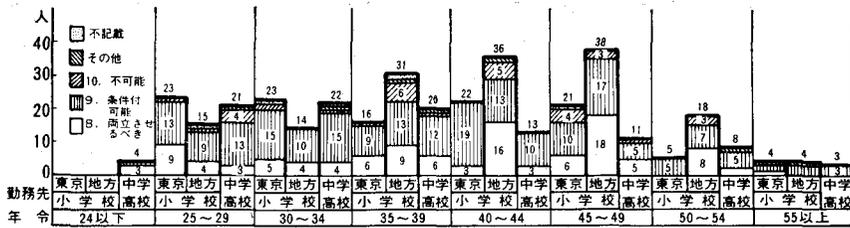
これは全く至誠会員の場合と同じく条件的両立が多いのは当然と思われる。すなわち育児担当者のいる事、通勤時間の短いこと、夫および周囲の人の理解と協力のあること、子供が健康であることが先ずあげられる条件で、その上に母の両立に対する積極的な意欲が必要であるという。至誠会



第5図 職業の継続



第6図 母子隔離の子供への影響



第7図 仕事と家庭の両立

員の場合の、第一に母の健康と仕事に対する意欲が両立を可能にするという結論と同様であるが、母の健康について特にいわずに、子の健康が条件に入っているのは、母が若く健康なのと共に公務員として健康管理が充分なので、自分の健康は当然として考えの中に入らないのかと思われた。そして子供の病気は勤務を休む事になり、担任の都合や担任の子供達の授業計画等に支障を来すので、身にしみてその健康を条件とし、また前項で病児保育を希望しているのかと思われた。子供の病気は予定できず、迅速な処置を要し、病院や医院の診療時間の問題も、待時間の長いこともあり、働く母、殊に勤務者は、勤務時間との調整もとりにくく、親としての心配も加わって、困ることの多い点であろう。

その他の意見・感想

最後に何でも書いて下さいという欄では、感想として、再び、教職は男女差の最も少ない職業で、勤務態勢としては責任も多く、かなりきびしいが、女性に適した、やり甲斐のある仕事という点が強調され、教育という面からは、女教師も人の妻となり、子の親となることは是非必要で、そのために教師としても大きく育つことを言っている。産休としては規定通りとしても、他職業よりは夏休み、学年末休み等、休暇が多いのは救われるといい、加えて夫が同業の場合はこの休暇を母子隔離の欠点を補ない、家族の共通の団楽の時として利用できる点をあげている。家庭に学校の仕事を持ち込まない覚悟で、昼間一心にやつてしまうことがよいといいながら、教師としての勉強、研究の時間は中々持てないし、まして協同研究や講習会出席時間などは極力割愛しなければなら

いことも、残念ながら認めざるを得ない状況についても述べてある。この点から見ても、働く婦人と育児については、まだ考え、解決しなければならない問題は多いと思ひ、よい方法を見出したい。

むすび

働く婦人と育児の問題をよりよい方向に進むようにとはじめた実態調査の1部として、女教師の概況について調査した。

全女教師数と比べてアンケート発送数も少なかったが、概況はつかめると思ひ、23歳から63歳の366通について集計した。

殆どが公務員なので、出産に対する休みの日数は規定通りで、更にそれを夏休みなどで少なくするような計画産児も行なわれているようで、職業として、担任の子供達を愛し、責任をもっている様子がうかがわれた。子供数は2人が多く、育児担当者は祖母が絶対多数である。育児休暇の必要性を希望しながらも、現状として育児時間の休みもとらない有様があり、研究・勉強の時間は、子供の幼い間は中々とれないことも述べられていた。母子隔離の悪影響をみとめるものはかなり多く、至誠会員の良い影響、そんなに悪い影響はないのと比較して、女教師は勤務態勢で長時間隔離されるためかと思われた。

大多数が教職は男女差の最も少ない、女性に適した職業として、きびしい途だが頑張りたい旨の記述が行なわれていた。他職業より休暇の多い点は皆述べて、これを良く利用したいと考えていた。

私共は自分達の1日が24時間ではとても足りないと思つた育児期間を思い起し、お互協力してよ

い方法を見出したいとほむほむ感じた次第である。

現場女教師の方々のご協力を謝し、ご活躍を祈り、一  
三会以外の至誠会の先輩、後輩のご協力を深謝する。

(この調査報告の要旨は、東京女子医科大学学会第41  
回総会において発表した。)

#### 参考資料

- 1) 現代日本女性の意識と行動，婦人に関する諸問題の総合調査報告書，婦人に関する諸問題調査会議編（昭和49年3月）
- 2) 第6次出産力調査結果の要点，厚生省人口問題研究所（昭和48年4月）
- 3) 中野英子：女子労働力人口の動向と問題点，人口問題研究 122号 6～19（昭和47年4月）
- 4) 国民衛生の動向，厚生指標 22(9)（昭和50年8月）